

2023 年度中央図書館利用者アンケート調査実施報告

稲葉 直也（資料管理課）

はじめに

本稿は、図書館ラーニング・コモンズ運用検証チームの利用者支援課・資料管理課メンバーが実施した「場所としての中央図書館利用に関するアンケート調査」を、チームを代表して筆者が報告するものである。

1. 本アンケート調査実施の背景

本アンケート調査は2016年、2019年にも実施しており、今回は3回目となる¹⁾。前回実施の2019年以降、特に2020年から2022年までの間、中央図書館は未曾有のコロナ禍の影響を受け、利用ルールは制限せざるを得ず、利用者の図書館利用の有り様も一変した。2023年度を迎え、利用ルールはようやく元通りとなり、入館者数もコロナ前の水準に近づき、ポストコロナと呼べる状態へと回復した。別途行っている館内利用調査でも、基本的な利用の様態は元に戻ったことが確認できている²⁾。

だが、表層的な利用や、統計の数値としては回復を見せても、コロナ禍を経たことで、よく図書館を活用する利用者の意識、図書館に対して求める要素、利用の決め手となる要因には、何らかの変化が起きているのではないか。これを分析・把握することで、ポストコロナにおける図書館サービスの在り方の検討の一助とするため、4年ぶりに本調査を実施することにした。

2. アンケート調査実施方法

アンケート設問は、過去2回のを踏襲し、「中央図書館の施設や機能」、「中央図書館の利用エリア」、「図書館・図書室以外の学習施設」に関する3つの設問群に加え、2023年調査では「中央図書館の蔵書」に関する設問群を加えた。図書館の蔵書自体が図書館利用に極めて強い影響を持つことは、過去の調査でも判明していた。そのため、蔵書そのものへの選好の詳細を明らかにする必要があると判断し、蔵書に関する設問を加えた。また各設問で、過去調査で不十分だった点を補う選択肢を一部追加した。

調査実施日は、過去2回に倣い、通常の授業実施時期の5月の平日に行うこととし、2023年5月18日とした。当日は10:00、13:00、16:00、19:00の4回、図書館職員が館内を巡回し、滞在するすべての利用者にアンケート用紙を配付し、退館時に提出を求めた。2023年調査の新たな試みとして、アンケート用紙のQRコードからオンラインでも回答可能とした。エリアごとのアンケート配付数と、オンライン回答も含めた回収実績は表1の通りである。

表1 エリアごとのアンケート配付数と回収実績

	配付数	回収数	有効回答数	有効回答率
Silent Area	134	64	63	47.0%
Quiet Area	243	131	130	53.5%
Active Area	473	119	117	24.7%
合計	850	314	310	36.5%

回答者の属性は、学部学生64.5%、大学院生17.4%、教職員・研究員3.2%、校友12.4%、その他2.5%であった。また回答者の74.0%は図書館を週に複数回、36.8%は週に4-5回以上利用し、54.3%が当日も3時間以上滞在予定であるなど、まさにヘビーユーザーと呼べる利用者群である。以下の調査結果と分析が、当館を極めてよく活用する利用者の傾向である点は、予めお断りしておく。

3. アンケート結果報告

本章で一部の設問の結果を報告するが、一通りの集計値と、そこから読み取れる内容の速報に留まっている。また紙幅の都合もあり、自由記述による回答を中心に、すべての設問とその結果の報告はできない。それらの集計と分析も含めた詳細は、2024年3月刊行の『早稲田大学図書館紀要』71号にて、改めて公開する予定である。

3-1 中央図書館の施設や機能について

表2 中央図書館の利用に欠かせないと思う要素や環境

	2023年調査 (n=310)		
	平均点	1位率	得票率
3人で集中して作業ができる	1.73	34.2%	80.3%
2静穏な環境である	1.18	19.7%	57.1%
1必要な資料がある	1.17	26.5%	50.6%
5無線LANでPC等が利用できる	0.89	10.3%	47.4%
8利用したい時に開館している	0.67	5.5%	42.6%
6グループで学習ができる	0.10	1.3%	5.8%
9他の利用者が周りにいる	0.07	0.3%	4.8%
4備付PCが利用できる	0.05	1.0%	2.3%
7図書館員に質問・相談ができる	0.02	0.0%	1.9%
10その他	0.07	0.6%	3.9%

まず、中央図書館を利用する際に、欠かせないと思う要素や環境を、1位・2位・3位で順位づけして選択する設問の結果を表2で示した。結果の見方だが、1位は3点、2位は2点、3位は1点と計算し、各要素の合計点を有効回答数で割って平均点を算出した。1位率は、1位と選択した回答数が有効回答数に占める割合、得票率は1・2・3位いずれかで選択した回答数が有効回答数に占める割合を算出した。単純化すると、平均点が0.5を超える網掛けをした要素は回答者の半数が、濃い網掛けの1.0を超えるものは回答者のほぼ半数が、影響力のある要素

として捉えていると、点数上みなすことができる。また、1位率はその要素がどれだけ強く支持されるか、得票率はどれだけ広く支持されるかの指標となる。平均点に加え、1位率と得票率をそれぞれ見ることで、その要素の影響力の大きさの「幅」を掴むことができる。

表2から、2023年調査では「一人で集中して作業ができること」「静穏な環境であること」「必要な資料があること」の3つが、図書館利用に特に強く求められる要素という結果だと分かる。次いで、「無線LANが利用できること」「利用したい時に開館していること」といった、学習場所としての環境に関する要素へ支持が集まっていた。これらの傾向は、2019年までの調査で得られた結果とほぼ同様であったが、ただひとつ異なるのは、「一人で集中して作業ができること」が平均点1.73、1位率34.2%、得票率80.3%と、他の要素と比較して極めて高い水準で支持されるようになったことである。

表3 中央図書館の利用に欠かせないと思う要素や環境 (2019年)

	2019年調査 (n=498)		
	平均点	1位率	得票率
2静穏な環境である	1.36	22.1%	65.5%
1必要な資料がある	1.26	30.1%	53.0%
8利用したい時に開館している	1.02	15.7%	54.0%
3一人で集中して作業ができる	1.00	14.9%	52.2%
5無線LANでPC等が利用できる	0.97	13.7%	49.0%
4備付PCが利用できる	0.15	1.4%	8.4%
6グループで学習ができる	0.13	1.6%	8.2%
7図書館員に質問・相談ができる	0.05	0.2%	3.8%
10その他	0.04	0.4%	2.6%

表3で、2019年調査の同設問の結果を示したが、2023年とほぼ同じ要素が高い水準で支持を得ていた一方で、「一人で集中して作業ができる」は平均点が1.0であり、1位率や得票率を見ても、それほど飛び抜けた支持を得ていたわけではなかった。詳細な分析は追って必要だが、コロナ禍以降、「一人で利用できる」ことが特に重要視されるようになり、多くの利用者の意識や傾向に変化が生じたことがうかがえる興味深い結果である。

次に表4で、中央図書館の利用用途を、複数回答を認めて選択した結果を、2019年調査と比較して示した。この結果にはあまり大きな変化はなく、基本的に図書館は資料

表4 中央図書館を利用する用途について (複数回答可)

	2023年調査(n=310)		2019年調査(n=499)	
	得票率		得票率	
5レポート・論文作成	63.2%	65.3%		
4授業の予習・復習	60.3%	58.7%		
1資料の利用 (閲覧・貸出)	57.4%	54.5%		
2文献の収集・調査 (情報探索)	43.5%	-		
7資格試験等の外部試験勉強	40.3%	36.1%		
6期末試験等の学内試験勉強	38.4%	40.5%		
12空き時間を過ごす	30.0%	35.1%		
8その他の調査や研究	13.5%	19.4%		
3電子ジャーナルやデータベースの利用	12.3%	11.8%		
10グループ学習・ディスカッション	5.5%	11.2%		
9備付PCの利用	4.2%	8.6%		
11図書館員に質問・相談する	1.3%	1.0%		
13その他	1.9%	3.8%		

の活用や、それに付随した学習や研究用途に使われている。

中央図書館は2018年から2019年の改修により、大規模なラーニング・コモンズを備えるに至った。しかし、図書館利用者の性質に合わせ、グループで集い議論を行うといった一般的な在り方とは異なる、単に「活発な利用」がされることを是としな方針を掲げている³⁾。そのため、グループ学習・ディスカッションでの利用は5.5%と前回調査より低い水準に留まり、静かに集中して学習や研究ができ、かつ一人で集中して利用できる環境が好まれること自体は、ラーニング・コモンズの典型的な利用形態には反する結果だが、当館のサービス設計上は決してマイナス評価ではない、意図に近い結果であると補足しておく。

以上、中央図書館の施設や機能に関する設問の一部を報告したが、ポストコロナと呼べる環境において、利用者が図書館に求める要素への重要な変化が垣間見えた。図書館サービスへの還元のため、詳細な分析を続けていきたい。

3-2 中央図書館の蔵書について

表5 中央図書館の蔵書に欠かせないと思う分野・分類

	(n=290 *当該設問未回答者20名)		
	平均点	1位率	得票率
4. 社会科学 (政治、経済、財政)	0.98	20.3%	43.4%
3. 歴史 (歴史、各国史、地理・伝記含む)	0.70	12.1%	34.8%
1. 総類 (図書館学、百科事典、全集・叢書等)	0.61	13.8%	27.2%
5. 社会科学 (法学、法律)	0.60	11.4%	27.9%
12. 日本文学 (各種日本文学)	0.54	10.3%	25.5%
6. 社会科学 (社会、教育、その他)	0.54	8.3%	28.6%
2. 哲学 (哲学、心理学、宗教等)	0.49	5.9%	26.9%
11. 言語 (日本語、英語等の諸言語学)	0.37	3.1%	20.7%
10. 芸術・美術 (音楽、演劇、スポーツ含む)	0.27	2.4%	15.9%
7. 自然科学 (数学、物理、化学、医学等)	0.19	2.8%	10.3%
13. 英米文学 (各種英米文学)	0.16	3.1%	9.0%
9. 産業 (各種産業、商業、運輸通信等)	0.15	2.4%	7.9%
14. その他外国文学 (独・仏・その他諸外国)	0.11	1.7%	5.5%
8. 技術・工学 (生活科学含む)	0.07	0.7%	4.1%
15. その他	0.07	1.7%	3.1%

本節は、2023年調査より新設した中央図書館の蔵書に関する設問の結果を報告する。まず中央図書館の蔵書について欠かせないと思う分野・分類を、1位・2位・3位で順位づけして選択する設問の結果を表5で示した。

社会科学系の中でも、政治・経済分野が平均点0.98とやや高い支持を得ているが、多様な分野の資料が好まれていた。平均点1.0を超えるほどの圧倒的な支持を集める分野・分類はなく、中央図書館の利用者が多く所属する早稲田キャンパスの、多彩な学部・学科構成が反映された傾向と言えよう。日本文学や英米文学など、文学系への支持がさほど集まっていないことは意外と感じられる結果だったが、これらを専攻・研究する利用者の多くは、戸山キャンパスの戸山図書館を主に利用するのではないかと考えられた。継続的に同様の調査を続けることで、今後の蔵書構成や選書に役立つデータが積み上げられると期待できる。

3-3 資料の利用について

表6 図書館資料の利用頻度

A 図書館資料の利用頻度(n=304)

	1. あまり使わない	2. 時々使う	3. よく使う
日本語図書	25.0%	30.9%	44.1%
外国語図書	71.4%	21.4%	7.2%
雑誌論文・新聞記事	50.0%	34.9%	15.1%
辞書・事典・年鑑類	70.1%	23.4%	6.6%
貴重書・古書資料	80.6%	17.1%	2.3%

表6は資料の種類ごとの利用頻度をたずねた設問の結果で、日本語図書は比較的好く使うものの、それ以外はあまり使わないという回答が多かった。これは、回答者の64.5%が学部学生であることが反映された結果ではあるが、ヘビーユーザーが多くを占める本アンケート回答者群でも、雑誌論文や辞書・事典類の利用頻度がそれほど高くない点は、図書館職員としては少々残念に感じられた。ただ、この設問の結果は、大学院生や教職員などの「研究者」に絞って分析すると、異なった傾向が得られることが判明しているため、この詳細な分析は年度末の『図書館紀要』で改めて報告したい。

表7 紙媒体と電子資料の選好

B 次の図書館資料を、紙媒体と電子資料どちらを好むか(n=305)

	1. 紙媒体	2. どちらも良い	3. 電子媒体
日本語図書	62.3%	32.5%	5.2%
外国語図書	48.9%	39.7%	11.5%
雑誌論文・新聞記事	50.8%	32.8%	16.4%
辞書・事典・年鑑類	46.9%	37.4%	15.7%
貴重書・古書資料	49.2%	38.7%	12.1%

資料の種類ごとに、紙媒体と電子資料どちらを好むかをたずねた設問の結果は表7の通りであり、概ね紙媒体が高い水準で支持されていた。現状の図書館は、外国語図書や雑誌・新聞では電子資料を積極的に導入してきているが、図書館を好んで活用する利用者の大半からは引き続き紙媒体が好まれている。なかでも日本語図書で紙媒体が好まれる傾向は、日本語図書の電子化の遅れが少なからず影響していると考えられる。とはいえ、「どちらでも良い」という層も含め、電子資料を好む利用者も相当数おり、一定に受容されていることが確認できた。

表8 電子資料の利用頻度

C 図書館の提供する電子資料の利用頻度(n=295)

1. あまり使わない	2. 月に数回使う	3. 週に数回使う	4. ほぼ毎日使う
57.3%	26.1%	13.2%	3.4%

表8に示す電子資料の利用頻度をたずねた設問の結果を見ても、既に電子資料は、資料の種類によっては使う必要がある状況であり、好むと好まざるとに関わらず受け入れられていることが、改めて確認できたと捉えられよう。なお、紙媒体と電子資料の選好、電子資料の利用頻度、いずれの設問も研究者に絞り結果を見ると、傾向は一変する。詳細は別の機会に譲るが、特に外国語図書や雑誌論文では電子資料への支持が高い傾向にある点は、本稿でも触れておきたい。また本調査とは別に、

2023年6月1日から30日にかけて、早慶和書電子化推進コンソーシアム⁴⁾により、「大学図書館における電子書籍の利用について」と題したWebアンケート調査も行われた。こちらは本調査とは異なり電子資料に特化した設問で構成され、より詳細な電子資料の利用実態が明らかになると期待できる。本調査との結果の差異についても注目し、詳細を待つこととしたい。

おわりに

繰り返しとなるが、本稿は2023年調査の速報に留まるものである。さらに多角的に考察した結果、また今回報告できなかった設問や、自由記述回答から得られた多種多様な見解の分析は、年度末刊行の『図書館紀要』に掲載することとし、本稿は一旦ここで筆を擱く。

注・参考文献

- 過去2回の調査は次の2つの論文で発表している。稲葉直也. 図書館はなぜ利用者に好まれるのか：中央図書館新ゾーニングの検討に向けた利用者アンケート調査報告. 早稲田大学図書館紀要. 2017, no. 64, p. 33-73. <http://hdl.handle.net/2065/00052331>, (参照 2023-06-27).
稲葉直也, 山下修平, 湯川亜矢. 続・図書館はなぜ利用者に好まれるのか：中央図書館改修前後の利用者アンケート調査結果比較. 早稲田大学図書館紀要. 2020, no. 67, p. 52-104. <https://doi.org/10.20556/00063996>, (参照 2023-06-27).
- 館内利用調査は2016年以来、中央図書館で継続実施し、2021年度の実施内容は次の論文で報告をしている。稲葉直也. ポストコロナの大学図書館員のあり方と学習支援を考える：早稲田大学図書館における「エビデンス・ベース」の実践から. 早稲田大学図書館紀要. 2023, no. 70, p. 54-79. <http://hdl.handle.net/2065/00093608>, (参照 2023-06-27).
- 本改修とコンセプトの詳細は本誌でも度々報告しているが、直近では以下の記事がある。稲葉直也, 山下修平. コロナ禍における早稲田大学中央図書館の館内利用実態：中央図書館利用の今昔とその実態把握の試み. ふみくら. 2021, no. 100, p. 6-9. <http://hdl.handle.net/2065/00081351>, (参照 2023-06-27).
- 詳細については、次の記事を参照されたい。渡邊孝之. 早慶和書電子化推進コンソーシアム：2022年10月～2023年1月の動き. ふみくら. 2023, no. 103, p. 12-13. <http://hdl.handle.net/2065/00093565>, (参照 2023-06-27).